

温泉ドラゴン王国 2
〜この国もさうじや、一瞬が命ごとく〜

山川進





プロローグ

「アリマの妹さんはどのような方なのですか？」

白い湯気が立ちこめる露天風呂で、入浴中の美少女——ハナマキが僕に問いかける。

湯船に体を沈めていた僕は、隣にいるハナをちらりと見て——ほんのりと桜色に上気した頬と、結わえた髪の下から覗く白いうなじと、スレンダーなのにとても柔らかそうな曲線美が目に入って——慌てて浴室の壁へと視線を逸らした。

大浴場の壁には三本の稲妻をあしらった紋章が飾られている。これこそ、極東の小国「ユ国」を象徴する王家の家紋だ。

ここはユ国王宮内にある露天風呂。心地良い天然温泉が自慢の湯船で、ユ国王子の僕——ユ・アリマと温泉学者のハナマキは、肩を並べて混浴していた。

大浴場には僕たち以外に人気はなく、今は二人の貸し切り状態だ。

「どうして妹のことは知っているの？」

「ユフィ様から聞きました。妹さんは十二歳で、今は隣国に留学されているそうですね」
妹自慢をするユフィの得意げな顔が思い浮かび、僕は苦笑いする。

「妹は僕と違って頭の出来が良くてね。飛び級で隣国の高等学院に通っているんだ。留学先ではいろんな研究に参加しているらしいよ」

「妹さんは学者志望なのですか？ 姉妹なのにユフィ様とはタイプが全然違うんですね」
 「そうだね。姉のユフィはきさくな性格だけど、妹の方は人見知りと言うか最初から好かれるつもりがないと言うか……。そういう意味でも正反対のタイプかもね」

久しく会っていない妹の顔を思い出しながら、僕は何気なくハナを見て……。湯船に浸かる彼女の胸元へと視線を落として、慌てて目を逸らした。

露天風呂は山の麓に作られているため、湯船から緑豊かな大自然が眺望できる。すり鉢状の山間には森の緑が鮮やかに生い茂り、連なる山々の向こうにはユ国が誇る天下の名峰又プル山が白い万年雪を輝かせていた。

空の青、大地の緑、雪の白……。色彩豊かな自然のコントラストを僕は堪能する。

「妹さんともこうして一緒にお風呂に入ったりしたんですか？」

「昔はよく入っていたよ。小さい頃は、妹の髪を洗ってあげるのが僕の日課だったんだ」
 懐かしさと寂しさを同時に感じながら、僕は隣にいるハナをちらりと見る。ハナは頬が桜色に染まり、髪がしつとりと濡れていて妙に色っぽく感じられた。水滴がハナのうなじから首筋に流れ落ちていき、そのまま胸の谷間へと……。
 「ところで、さっきからちらちらと私を見ては目を逸らしていますよね？」

「はい!? な、なんのことかなー」

胸の谷間に流れ落ちる水滴から、僕は慌てて目を逸らす。

「だから、どうして目を逸らすんですか？ そんなに私と目を合わせるのが嫌なんですか？」

「そ、そんなことないよ。ハナから目を逸らしたりしてないから」

答えながら、僕は雄大な景色に目を向ける。天然温泉を楽しみながら風光明媚な景観を眺める贅沢を味わえるのは、世界広しといえどもユ国だけだ。はく極楽極楽。

「ちゃんとこつちを見てください！」

すねたように唇を尖らせてハナが顔を近づける。思わずのけぞり離れようとする僕の腕を、ハナは掴んで押さえつけた。「むにゅ」と柔らかな感触が、僕の腕に押しつけられる。「逃げないでください。それとも、私はアリマに嫌われるようなことをしましたか？」

最初は強気に、しかし途中から弱気になりながら、ハナが不安そうな声で尋ねてくる。

これ以上ごまかすのは無理か。

悟った僕は、ちらりと横目でハナを見て……。僕の腕にしがみつくハナの胸の谷間に自然と目が行って、慌ててぶるぶると首を振った。

「は、恥ずかしいんだ」

「え？」

「恥ずかしいんだよ！ そのくらい言わなくてもわかるだろう！」
「な、な、なに言ってるんですか！ だって今までに何度も混浴してきたのに、どうして今日に限って、その……」

ざぼっと水しぶきをあげてハナが湯船で立ち上がる。たちまち、意外と着やせするハナの全身が露わになった。

「それに、今日の私は裸ではないんですよ？ ちゃんと服を着ているのに、どうしてアリマが恥ずかしがるんですか」

ハナの言う通り、今日の彼女は服を着たまま入浴していた。

彼女が着ているのは薄手の白い長袖服で、前面をボタンで留める作りになっている。独特の形状をした服は、ハナ曰く「ワイシャツ」という古代人の衣服であるらしい。

今から四〇〇〇年前。この地では温泉をこよなく愛する「湯人」という古代民族が栄華を誇っていた。そんな偉大なる古代民族「湯人」が、ワイシャツなる民族衣装に並々ならぬ執着を持っていたことを、温泉学者のハナは最近になって突き止めたのだ。

古代の民族衣装「ワイシャツ」の一般的な使用方法は、「全裸の上にワイシャツを一枚だけ羽織る」である。湯人が残した複数の古文書に、そのような全裸にワイシャツの女性（以下、これを裸ワイシャツと呼称する）の精巧な絵画が散見されることから、彼らが裸ワイシャツを好んでいたことは明白だ。



つまり、ハナは古き良き伝統ののっとり、全裸にワイシャツ一枚という格好で温泉に浸かっていた。

「いいですか？ これは湯人が考案した『湯浴み着』と呼ばれる衣装です。湯浴み着とは入浴時に着用する衣服であり、これがあれば他人に肌を晒すことなくお風呂に入れるのです」

なるほど。風呂場で着るための服という発想は面白い。この湯浴み着があれば、人前で肌を晒すことに抵抗のある人でも気兼ねなく温泉を楽しめるだろう。

だが、この湯浴み着には重大な欠陥があった。

簡潔に言うと、裸ワイシャツは……たまらなくエロイのだ。

ワイシャツは生地が薄く、濡れるとうっすらと肌の色が透けて見えた。肌に貼り付いたシャツが体の線を浮き上がらせ、いやがおうにも妄想をかき立てる。

普段のハナは、野暮つたい研究服ばかり着ている純朴な少女だ。その大人しいハナが「濡れた裸ワイシャツ」という極悪な格好で迫ってくるものだから、普段とのギャップも相まって破壊力抜群だった。こんなの恥ずかしくて正視できるわけがない！

「目を逸らさないで、ちゃんと私を見てください！」

「無理！」

「無理じゃありません！ この湯浴み着を実用化できれば、人前で裸になることに抵抗が

ある人でも温泉を楽しめるようになるんです。問題点があったら言ってください。湯浴み着を着た私をちゃんと見て、正直な感想を教えてください！」

「正直な感想なんて言えるわけないだろ！」

「どうしてですか！ 私だって、は、は、恥ずかしいのを我慢して混浴してるんです！ だから、もっとしっかり私を見てください！」

顔を真っ赤にしながら、裸ワイシャツのハナが僕に迫ってくる。その恰好で恥ずかしがらないで！ 余計に破壊力が増すから！

「湯浴み着のことはわかったから、もうちょっと離れてくれないかな」

「いいえ、アリマはわかっています」

苦勞して再現した湯浴み着を正當に評価してもらいたいハナが、僕の足をまたぐような体勢で自分の体を見せつける。

僕としては目の高さちょうどハナの胸があるため、どうしても胸のふくらみに目がいつてしまう。だってしょうがないだろ。ハナって意外と、その……あるんだから。

かといって下を向けば、ワイシャツの裾から伸びる白い足が目に入る。ワイシャツの裾は足の付け根あたりを隠していて、なんとも見えそうで見えない絶妙さを發揮していた。

「目を逸らさないで、ちゃんと見てください」

……近づいてくるハナの体から、石けんの甘い香りが漂ってきた。

手を伸ばせば届く距離にハナの濡れた肌がある。柔らかそうな胸がある。細くくびれた腰がある。色白ですらりとした足がある。しかもハナは「見てください」と言いながら僕に迫ってくるのだ。ああ、なんだか頭がくらくらしてきた。

いろんなものにのぼせた僕が「もうどうにでもなれ！」とヤケになりかけた、その時。突然、ハナの背後で何かが水しぶきをあげて立ち上がった！

「服を着たまま風呂に入るな——!!」

「きゃ——!!」

「うわ——!!」

突如出現した全裸の美女が、いきなりワイシャツの襟元をつかみ、真下へと引きずり下ろす。ワイシャツのボタンがはじけ飛び、僕の眼前でハナの白い肌が露わになった。

「ユ、ユフィ様!? いきなり何をするんですか!」

ハナが胸を両手で隠しながらお湯に飛び込むと、ユフィと呼ばれた女性は一糸まとわぬ裸体で、豊かな胸を誇らしげに反らした。

「見損なったぞハナ! 水着で温泉に入るなどマナー違反、いや、マナー以前の問題だ! 水着での入浴が認められたりしたら、合法的に女子の裸が見られなくなるではないか! 可愛い女の子の裸体を観賞したり、触りまくったり、揉みまくったりして、羞恥心に頬を染める様子をニヤニヤしながら愛でるという私の楽しみを奪うつもりか!」

突如現れた変態の名はユ・イン⇨ユフィ。恥ずかしながら、僕の姉である。

すらりとした長身に、滑らかで艶のある長髪。凛々しい面立ちと気さくな性格で誰からも愛される王国の第一王女。それでいて、剣を持たせれば向かうところ敵無し。大陸最強の誉れ高い帝国軍と互角以上に渡り合ったユフィの勇名は、今や大陸全土に轟く勢いだ。

そんな美貌の女剣士ユフィが、実は重度のブラコンであり、可愛い女の子を愛でるのが大好きな変態である事実はあまり知られていない。

「ユフィ様は勘違いをしています。これは水着ではありません。これは湯浴み着といって入浴用に作られた衣服——」

「問答無用! 温泉では全裸! それが正義!」

「いや——っ!」

ユフィが逃げようとするハナを捕まえ、力づくでワイシャツをひん剥いていく。ハナが涙目で悲鳴を上げてもお構いなしだ。というより、泣いている女の子の服をひん剥くのが楽しくてたまらない様子だ。

……変な性癖に目覚めなければいけないけど。

呆れる僕の前で、ユフィは半裸のハナに抱きつき、彼女の胸を両手でわしづかみ。「ハナは可愛いな」などと耳元でささやきながら、柔らかな膨らみを上下左右にさわさわもみもみ。

「ひやあ……。ア、アリマ……。助けてえ……」
頬をピンク色に上気させたハナが、目尻に涙を浮かべて助けを求める。
潤んだ瞳の美少女から、吐息混じりの声で懇願された僕は、
「ごめん！」

いろんな意味で正視するのに耐えられなくなって、露天風呂から逃げ出した。

大陸の東の果てに位置する「ユ国」。

険しい山々に囲まれた辺境の小国は、平和だけが取り柄の貧しい国だ。

だけど僕は知っている。ユ国には、他国にはない素晴らしい資源があることを。

疲れた体と心を癒す、神が与えた奇跡の泉——温泉。

ユ国が誇る天然温泉の素晴らしさを天下に知らしめるため。ひいてはユ国を世界一の温泉観光大国にするため。

ユ国第一王子の僕は、温泉旅館を開業した。



第一話 温泉嫌いなプリンセス

「これが僕の温泉旅館か……」

朝日が皆さんさんと降り注ぐ早朝。僕——ユ国の第一王子であるユ・アリマと、丸メガネが似合う温泉学者のハナ＝マキは、瓦屋根の木造建築を前にして感動に浸っていた。

「ついに完成したんですね」

感慨深そうにハナが見上げているのは、いにしえの「温泉旅館」を再現した建物だ。

鷹が翼を広げたかのような横長の外観。屋根や玄関の庇には煉瓦焼きを応用した特注の瓦が用いられ、独特の風情を醸し出している。

木造二階建てで部屋数は全部で十二。基本は二人部屋だが、離れには大人数で宿泊できる大部屋も用意してある。旅館の中庭は庭園となっており、そこから王宮の露天風呂まで渡り廊下で行き来できる構造になっていた。

渡り廊下でつながっていることからわかるように、温泉旅館とユ国の王宮は隣接している。堅牢な石造りで「歴史ある古城」といった趣の王宮と、古代人の言葉で諭えるなら「みやび」とか「わふー」などと表現される独特の木造建築が隣り合っている様は、アン

バランスさが際だってなかなか人目をひく光景だ。

「旅館は土足厳禁にしたんですね」

ハナが玄関にある靴箱とお客様用のスリッパを見てつぶやく。

ユ国では屋内では靴を脱ぐのが一般的だが、他国はその限りではない。旅館を土足厳禁にするか、それとも靴のまま歩き回れるようにするかは、僕も大いに悩んだところだ。

「隣国の人には、玄関で靴を脱ぐ方が異国情緒があって喜んでもらえると思ってる」

日常では味わえない特別な体験をお客様に提供する。それも温泉旅館の大事な役目だ。「失敗はできないからね。やれることは何でもやらないと」

「失敗はできないからね。やれることは何でもやらないと」
 貧しいユ国はただでさえ財政が逼迫している。温泉旅館になけなしの予算をつぎ込んだ以上、これで失敗するわけにはいかない。ユ国が財政破綻を免れるかどうかは、温泉旅館の成功如何にかかっているのだ。

「大丈夫です。アリマの温泉旅館はきつと成功します」

「ハナにそう言ってもらえると自信が湧いてくるよ」

元気づけられた僕は、万感の思いを込めてハナを見つめる。

「これで温泉旅館が軌道に乗れば、観光収入でユ国を財政難から救うことができる。僕がここまで来られたのはハナのおかげだ」

「いいえ。アリマが頑張ったからです。私はほんの少し、お手伝いをしただけです」

「いいや。ハナがそばに居てくれたから僕は頑張ることができたんだ」

「それはアリマの力で……」

「ハナが居てくれたから……」

「アリマが……」

「ハナが……」

「うがー！ いちゃいちゃするでないわ！ 鬱陶しいのじゃー！」

突然の声に驚いて振り返ると、いつからそこにいたのか、メイド服を着た赤毛の少女が玄関前で仁王立ちしていた。

「ミ、ミササ？ いつからそこに居たの？」

「さっきからずっと居たのじゃ。アリマはいちゃいちゃするのに忙しくて、わしのことなど眼中になかったようじゃがな！」

背の低い少女が、不愉快そうに唇を尖らせる。

真っ先に目を引くのは、くるぶしまで届きそうな真紅の長髪。幼くあどけない顔立ちに、ツートールの髪型と青いメイド服が良く似合っている少女の名は、ミササ。一見すると十歳前後の可愛い女の子だが、こう見えて一〇〇歳をゆうに超える元レッドドラゴンだ。

竜王ラドンの名で人々に怖れられていたミササは、紆余曲折の末にドラゴンから人間へと華麗なる転身を遂げ、今では旅館の仲居として僕たちと共に生活していた。

「まったく。温泉旅館の本館が完成したと聞いて一目見ようと来てみれば、恥ずかしげもなくちくりあう二人がおるではないか」

「ちくりあつてないから!」

真っ青になって反論する僕と、真っ赤になってうつむくハナ。

僕らをからかって気が晴れたのか。ミササは「まあよいわ」とぶっきらぼうにつぶやくと、尖った犬歯を見せてニンマリと笑った。

「それで、名前は どうするのじゃ?」

「名前って、何の?」

「決まっておろう。この旅館の名前じゃ」

体は小さいのに態度は大きいミササが、両手を腰に当てながら顎で旅館を示す。

「店には名前がつきものじゃ。この旅館にも、さぞや立派な名前があるのじゃろう?」

「屋号か。そういうええば考えていなかったな」

ユ国の王都にも「火竜の鱗亭」や「白雲館」といった格好いい名前の宿屋がある。ミササの言う通り、この温泉旅館にもふさわしい名前があつてしかるべきだ。

「なんじゃ、まだ決まっておらぬのか。よいよい。ならばわしが、これぞという名前を考えてやろうではないか」

ミササがこめかみに人差し指を当てながら「うーん」とうなる。これが素なのか、それ



ともわざとやっているのか。元ドラゴンのミササは仕草がいちいち可愛くて微笑ましい。「そうじゃ！」「この世でもっとも強くもっとも気高くもっとも美しい灼熱の赤竜王ラドンと愉快な仲間達の館」というのはどうじゃ？」

「長いね」

「長いとか言う以前の問題だと思いますが」

「むむ。わしのアイデアにケチをつけるとは、矮小な人間に偉大なドラゴンのセンスは高すぎたかのう。ふおふおふお」

ミササのセンスが高尚かどうかは置いておくとして。旅館の名前は商売の顔となる大事な要素だ。ここは考えに考え抜いて最高の名前をつけなければ……などと思っていると、どこからともなく笑い声が聞こえてきた。

「ふっふっふっ。どうやら私の出番のようだな」

不敵な笑い声とともに草むらから姿を現したのは、僕の姉であるユ・イン＝ユフィだ。

僕より四つ年上のユフィは、長身で均整の取れたスタイル、ひときわ目を引く豊かな胸さらに凛とした気品ある顔立ちと誰とでもすぐに打ち解ける屈託のなさで、民から絶大な人気を得ているユ国第一王女だ。

麗しの美姫でありながら剣の腕前も達人級というユフィは、王国近衛隊長と温泉旅館の若女将という二つの役職を兼任していた。

「草むらで話は聞かせてもらった。ここは私が旅館の名付け親になってやろう」

「その前に聞きたいんだけど、草むらに隠れて何をしていたの？」

「知りたければ教えてやろう。隙を見てアリマを押し倒そうと、物陰に隠れてチャンスをつかっていたのだ！」

文武両道、才色兼備を地でいく美貌の王女ユフィ。そんな完全無欠の彼女には「重度のブラコン」という致命的欠陥があることを、国民の多くは知らない。

「それで、ユフィは旅館にどんな名前をつけたいの？」

「うむ。この旅館は私とアリマの愛の巣となる場所。そこで私は、愛欲に溺れた者たちが集う『失楽園』という名を提案する！ どうだ、背徳的な名前だと思わないか？」

「勝手に背徳的な宿にしないでくれるかな」

「恥ずかしいことはない。さあ、失楽園で私と背徳的な愛を育もう！ むちゅー」

ユフィが口をタコにして迫ってきたので、僕は彼女の腕をすりとかわす。たちまち、ユフィの腕は僕の隣にいたハナの華奢なウエストに巻き付いた。

「ユ、ユフィ様!？」

「相変わらずアリマはつれないな。仕方がない、今日のところはハナと背徳的な愛を育むとしよう。むちゅー」

「育みませんか!？」

唇をタコにしてキスを迫るユフィと、そんなユフィの肩を必死に押し返すハナ。しゃべらなければ美人とよく言われるユフィは、重度のブラコンであり、可愛い女の子が大好きな変態だった。返す返すも残念だ。

「なげかわしい！ ユフィ殿下はユ国の第一王女なのですよ！ 一国の王女らしく、もっと慎みのある振る舞いは出来ないのですか！」

お説教とともに登場したのは、軍服の上にエプロンをつけた壮年の白髪男だ。

年の頃は六十代前半。見事に色の抜けた白髪頭に、豊かにたくわえられた白い髭。寸胴ながらも引き締まった肉体からは、常日頃から鍛錬を怠らない軍人の気構えが感じられる。老いてなお戦える体作りを心がけ、日頃から軍服を着用して気持ちを引き締める武人の鑑。彼の名はイブスキ。王家三代に仕える忠臣であり、ユ国軍を束ねる古参の將軍だ。

その老將軍が、フリルのついたエプロン姿でユフィをにらみつける。

「ユフィ殿下は気が緩みすぎです。一国の王女らしく、あるいは軍を率いる武人らしく、常日頃より気持ちを引き締めていただきたい！」

「相変わらずイブスキは堅苦しいな。そんな生き方をしている息苦しくならないか？」

「なりません！ 私は將軍として常に部下の手下となるべく自分を戒め——」

「そ、それでイブスキはどうしてここに？」

説教が長くなりそうだったので僕は慌てて話を戻す。用件を思い出したイブスキは、手

に持っていたお玉でびしっとミササを差した。

「ミササ！ お主はまた厨房の魚を食べたであろう！」

「うむ。相変わらずイブスキの作る焼き魚は絶品じゃ。褒めて遣わす」

「今日はミササだけ朝飯抜きだ」

「なんじゃと——！！」

「それが嫌なら、仲居らしく朝食の準備を手伝え」

涙目のミササの首根っこを捕まえ、ずるずると厨房へ引きずっていくイブスキ。相変わらず二人は仲がいいなあ。

軍の重鎮である老將イブスキは、料理の腕を見込まれて旅館で板前として働いている。こう見えてイブスキの作る料理は絶品なのだ。ほんと、將軍にしておくのがもったいない。

「あ、そうだ。せっかくだからイブスキにも聞いていいかな？」

「はい？ 何でしょうか？」

足を止めたイブスキに、僕はこれまでの経緯を簡単に説明する。

「なるほど、旅館の名前ですか。では有名な格言を宿の名前にしてはいかがでしょう」

「格言？」

「はい。私には座右の銘があります。その言葉を旅館の名前にするのです。つまり」

いきなりイブスキはエプロンを脱ぎ捨て、しわ一つ無い軍服姿でかかとを合わせ、背筋

を伸ばしてカツと目を見開き、一分の隙もない所作で敬礼した。

「人生とは命がけの戦である！ 温泉旅館『常在戦場』へようこそ！」

「そんな旅館に泊まりたくないよ！」

「なんですと！ 『常に戦場にいるような心構えで生きろ』という血湧き肉躍る勇ましさが殿下にはおわかりにならないのですか！」

「温泉で血湧き肉躍る必要はないから」

「黙らっしゃい！ そもそも殿下には勇ましさが足りないのです！ 男は敷居を跨げば七人の敵がいると申します。生きるのは戦いなのです。常在戦場……この言葉をしかと胸に刻みつけ、殿下には強く勇ましい王になっていただかねば——」

くどくどくどくど。気弱な王子の行く末を案じた老将軍が、熱のこもった説教を始める。イブスキの説教が長くなりそうだと感じた僕は、助けを求めるようにユファイに目線を送った。目線を受けたユファイは、すっと目を逸らした。はくじょうものゝ。

「あんれまあ？ こげなとこに集まって何してんだ？」

僕が説教地獄に陥っていると、農作業を終えたばかりらしい、全身泥だらけの農民がどこからともなく現れた。

麦わら帽子をかぶり、首に手ぬぐいを巻いた野良着姿の大男が、日焼けした肉体を見せつけている。朗らかに笑う田舎訛り丸出しの彼こそ、ユ国国王ドーゴ三世陛下だ。

僕の父であるドーゴ三世陛下は、農業が趣味という変わり者の国王である。民と共に汗をかき、畑を耕す僕の父は、「国民に愛される親しみやすい王様」として人望で国を支えていた。それは僕には逆立ちしても真似できない芸当だ。

「今日は大根を収穫したんだべさ。これはイブスキにおすそわけだ」

土の付いた新鮮な大根をイブスキに手渡す陛下。とれたての野菜を近所におすそわけするあたり、すっかり農民が板に付いている。

「で、こげなとこで何やってんだ？」

「あ、はい。実は……」

かくかくしかじか。事情を語ると、陛下は感心したように何度もうなずいた。

「なるほどなあ。んだば、ここはオラも一肌脱ぐべさ」

「何かいいアイデアがあるのですか？」

「なんだ。とつときの名前があるべさ。温泉は身も心も温かくしてくれる癒しの泉だ。だから、温泉旅館でみんなの心がぼかばかと温かくなるようにと願いを込めて……『ほっこり農園』という名前はどうかだべか？」

「勝手に農園にしないでください」

「不満だべか？ 美味しい野菜が育ちそうない名前だと思っけどなあ」

ここには常識人はいないのか！ ある意味、予想通りの展開に僕は頭を抱えることしか

できなかった。

かくして、一つとして有益な意見は得られず、命名は一時棚上げとなった。みんなネーミングセンスなさ過ぎだよ！

僕の故郷であるユ国は、世界一の温泉大国だ。

多くの火山を有するため、マグマの熱で温められた地下水——いわゆる「温泉」が豊富に湧き出ている。特に王宮の裏山には源泉が二百箇所以上もあり、一つ一つの温泉がまったく異なる成分を有していた。温泉学者のハナが言うには、「狭い範囲にこれほど多様な温泉が湧き出ているのは非常にまれなこと」であるらしい。

これらの源泉を管理しているのが、山の麓ふもとに建てられた温泉研究所だ。温泉学者であり研究所所長でもあるハナは、ここで日夜、温泉の研究に励んでいた。

ハナに用事があった僕は、昼過ぎに旅館を出て、舗装されていない山道を登り、温泉研究所——という名の山小屋に到着して、さっそく扉をノックした。

コンコン。

「にゃん！」

山小屋の中からハナの声が聞こえてきた。

……にゃん？

違和感を覚えながら扉を開けた僕は、試験管やフラスコといった実験器具で埋め尽くされたテーブルと、古文書や學術書がぎっしりと詰め込まれた本棚と、実験用に収集された温泉水の入った水筒の束と、頭に猫耳を生やしたハナを目の当たりにした。

……もう一度言おう。頭からピンと尖とがった猫耳を生やしたハナがそこにいた。

「い、いらつしやいにゃん」

僕の入室に気づいたハナが、ぎこちない笑顔で挨拶する。

色気のない丸メガネ。無造作に整えただけのヘアスタイル。ファッション性より機能性重視の作業着という野暮いたい出で立ちたは、間違あやいなくいつものハナだけ……。

「ハナ。頭から猫耳が生えてるよ」

「こ、これは、ちょっとした手違いにゃん！」

「どういう手違いが起こったら頭に猫耳が生えるの？」

「うう……。私が前に『猫人間になる温泉』を調べたことは覚えてるにゃん？」

「もちろん。頭に猫耳が生えて、お尻おしりから尻尾しっぽが生えて、猫の強靱きんじんな脚力を身につけられる温泉だよ」

僕は帝国との戦争で、猫人間になった兵士たちがにゃーにゃー叫びながら敵兵を蹴散けちらしていた様を思い出す。あの光景は忘れたくても忘れられない。

「私は、調べた温泉はサンプルとしてすべて保管するようにしているにゃん」

そう言ってハナが示したのは部屋の隅にある戸棚だった。ハナが戸棚を開けると、そこにはお湯の入った試験管が二十本近く納められている。

「それで、保管した温泉を整理していたら、うっかり手が滑って……」

「保管してあった『猫人間になる温泉』を自分にかけてしまった、と」

「にゃん……」

自分のドジを恥じるように、猫耳が「しゅん」と倒れていく。可愛いなこのやろう。

よく見ると、ハナのお尻からは猫の尻尾が生えていた。それはもう思わず握りしめたくなるようなもふもふの尻尾だ。可愛いなこのやろう。

「つまり、ハナは温泉の効能で猫になったってこと？」

「違うにゃん。『猫』じゃなくて『猫人間』だにゃん」

ハナの説明によれば、「猫」と「猫人間」はまったくの別物であるらしい。猫人間とは、頭にふわふわの猫耳が生え、お尻からもふもふの尻尾が生え、語尾が「にゃん」になった人間を指すのだそうだ。

温泉の力を用いて、猫ではなく「猫耳が生えた女の子」を作るあたりが古代民族「湯人」のこだわりだった。どういうこだわりなのか僕には理解できないけど。

——温泉を持つ奇跡の力。これを僕たちは「効能」と呼んでいる。

複数の温泉の成分を計算して混ぜ合わせる技術を、僕たちは「温泉調合」と呼んでいた。

この調合によって温泉は様々な奇跡を起こすことができるのだ。

たとえば、猫人間になったハナ。女の子の体に猫耳と尻尾が生えて語尾が「にゃん」になったのも、ハナが調合した温泉の効能によるものだ。

たとえば、温泉旅館の仲居ミササ。人々から竜王と怖れられたレッドドラゴンが、人間の少女ミササに生まれ変わったのも温泉の効能によるものだ。

——温泉。それは、人々の願いを叶える奇跡の泉。

ユ国が誇る多種多様な源泉と、それを調合する温泉学者ハナがいれば、どんな願いも叶えられる。この事実が広く知れ渡れば、温泉を求めて世界中から人が集まるのは間違いない。そのときこそユ国は世界一の温泉国家として大成するのだ！

……と、そこまで考えて、僕はふと疑問を抱く。

効能といえは、ハナは自分の体に何度となく温泉をかけているが、かけた温泉同士が混ぜり合って変な効能が生まれたりしないのだろうか。

僕が抱いた素朴な疑問に、ハナは猫耳をびんと立てて答えてくれた。

「温泉調合はとてもシビアなので、配合量を少しでも間違えたら効能は現れないにゃん。にゃので、適当に温泉をかけても偶然効能が出ることはまずあり得ないにゃん」

当てずっぽうで調合しても、ただのお湯にしかならない。それがハナの言い分だった。

「それなら、たとえば一つ目の温泉に入った直後に、濡れた体で二つ目の温泉に入っても、

変な効能が現れることはないんだね？」

「可能性はほぼゼロに等しいにゃん。可能性で言うなら、調査した温泉から同時に二つの効能が現れることの方がよっぽどあり得る話で、そっちの方が注意が必要にゃん」

「効能が二つある温泉があるの？」

「古文書を参考にして調査したものは、安全性が高いので効能が複数現れることはまずないにゃん。ただ、私が独自に開発した調査では副作用が出ることも……」

「副作用？」

「狙った効能の他に予想外の効能が現れることから、私はそれを『副作用』と呼んでいるにゃん。調査が上手くいったと思っても、思わぬ副作用が出て使い物にならないことがままあるにゃん」

にゃあにゃあど温泉調査の難しさを訴えるハナ。いつもは大人しいハナだけど、温泉の話題だと途端に熱く語り出すのが彼女の特徴だ。

それにしても副作用とは言い得て妙だな……と、今日はそういう話をしに来たんじゃない。

「ところで、今日はハナに頼みがあったて来たんだ」

猫耳ハナに気を取られて本来の目的を忘れかけていた僕は、改めて話を切り出す。

「実は、温泉旅館を繁盛させるアイデアを探しているんだ。古代の温泉地について知って

いることがあれば教えてくれないか。先人の知恵から学べることもあると思うから」

「にやるほど。そういうことにやら……」

思い当たることがあったのか。ハナは僕に背を向けると本棚を探り始めた。

古文書を調べるハナの尻尾が楽しそうに揺れている。こうも目の前で動かれると、無性に握りしめたくなるよね。うずうず。

「あつたにゃん」

僕が尻尾の誘惑と戦っている間に、ハナが一冊の本を棚から抜き出した。

「これに『コーヒー牛乳』という怪しい飲み物の記述があるにゃん」

「怪しい飲み物？」

古文書のページをめくると、細長い瓶に入った飲料物の精巧なイラストが目に入った。

「これがコーヒー牛乳？ 牛乳はわかるけど、この『コーヒー』って何だろう？」

「ここを読む限りでは、謎の黒い液体としかわからないにゃん」

古文書によれば、コーヒー牛乳は温泉旅館では定番の飲み物とのこと。温泉をこよなく愛する「湯人」がそう言うのだから、コーヒー牛乳が湯上がりにも最適なものは間違いない。

「なるほど、これは興味深いね。とりあえずイブスキに相談してみよう。食材に詳しいイブスキなら、謎の黒い液体の正体がわかるかもしれない」

「それがいいにゃん。それから……」

だんだん楽しくなってきたのか、瞳を輝かせたハナが次なる古文書を求めて本棚を探る。ハナのお尻でもふもふの尻尾が左右に揺れていた。すごく、握りしめたい。うずうず。

「アリマ」

「はいっ！」

ハナのお尻に手を伸ばしかけていた僕は、名前を呼ばれてぴんと背筋を伸ばす。何も気づいていないハナは、一冊の古文書を僕に差し出した。

「この本には、温泉地の娯楽が記されているにゃん」

「温泉地の娯楽？」

「たとえば、お座敷で遊ぶ定番のゲームとして『野球拳』というものがあつたにゃん」

「やきゅうけん？ それはどういうゲームなの？」

「それが、この本だけではよくわからないにゃん。何かの拳法で対決するらしいので、試しにみんなやってみたらどうにゃん？」

「うーん。あんまり楽しくなさそうだからいいや。他にはないの？」

僕は退屈そうな「やきゅうけん」をスルーすると、別の娯楽はないかとハナに尋ねた。

「あとは、古代の温泉旅館には必ず『卓球』なる遊技台があつたにゃん。昔の人々は温泉地へ行くと、狂ったように卓球に興じていたらしいにゃん」

「狂ったように!? それはどんな競技なの？」

「文献によると、浴衣を着た二人の人間が、緑色の四角い板を挟んで向かい合い、小さくて丸い玉を、スリッパで叩きあう対戦型ゲームにゃん」

「スリッパ？」

浴衣を着た男二人が、緑色の板を挟んでにらみ合い、髪を振り乱しながらスリッパで玉を叩きつける。それが、古代の人々を熱狂させた魔性の競技「卓球」――。

わからない。古代人の発想は斬新すぎて、凡人の僕にはまるで理解できない。

「……でも、どんな競技なのか、ちょっと見てみたいかも」

「わかったにゃん。古文書を元に卓球台を再現してみるので、今度みんなやってみるにゃん。それから、こっちの古文書に――」

さらなる娯楽を求めてハナが別の古文書に手を伸ばす。ぱらぱらとページをめくるハナの尻尾が、僕の目の前でゆらゆらと揺れている。ふわふわもふもふの尻尾はとても触り心地が良さそうで、僕はうずうずしてしまふ。ううう、ああもう、我慢できないっ！

ぎゅっ。

「ふにゃー——っ!!」

いきなり尻尾を掴まれたハナが、奇声を上げて飛びかかってきた。野性の本能で、ハナが僕の顔に爪を立てる。痛っ！ ざっくりと音がして、僕の頬に血の筋が浮かびあがつた。一瞬で鋭い爪を生やして僕の頬に傷をつけてしまうと、猫人間は自在に爪を出し入れ

することもできるのか。

「ご、ごめんなさいにゃん！」

僕が感心していると、ハナが真っ青な顔で僕にしがみついていた。どうやら僕が思っている以上に傷は深かったようだ。僕の顔を傷つけたハナは、ひどくうろたえていた。

「大丈夫だよ。このくらいの痛みなら我慢できるから」

「大丈夫じゃないにゃん！　すぐに手当てをしないとダメにゃん！」

そう言うと、ハナは僕の首に腕を回してきた。何事かと思っていると、ハナは迷うことなく顔を近づけて……僕の頬を舐め始めた。

「ぺろぺろぺろ」

ハナの舌が僕の頬をぺろぺろとなめ回す。首筋に抱きついている彼女の重みと、頬に当たるざらざらとした舌の感触と、一心に僕の頬を舐めているハナの顔が間近にあつて……。なんだらう、傷が痛いのに、なんだかとても気持ちいい。

「ハ、ハナ？」

「動かないでくださいにゃん。ぺろぺろ。これが、アリマの味にゃん。ぺろぺろ。なんだか変な気分じゃん。ぺろぺろ……」

舐められすぎて背筋がぞくぞくしてきた僕が、新たな世界の扉を開きかけたところで、「これ、アリマの血の味……ぺろぺろ……不思議な……ぺろぺろ……ぺろ……べ……」



ハナは抱きついた体勢のまましばし硬直すると、おもむろに両腕をほどき、そのまま両手を地面について「にゃあ……」と落ち込んだ。やっと我に返ったようだ。

「ええと、とりあえず、猫人間からもとに戻ろうか」

「はいにゃん……」

そうしてハナは、戸棚の奥から中和剤を取り出した。ハナの猫耳が消えるのかと思うと、ちょっとだけ惜しい気分になったのはここだけの秘密だ。

「ところで、今はどんな温泉を調査しているの？」

温泉地の娯楽を探るべく古文書を漁っていた僕は、雑談のつもりで最近の研究成果をハナに尋ねた。文献を調べていたハナが、本を読む手を休めて質問に答える。

「最近、温泉の発動タイミングをコントロールする研究をしています。これまでの温泉はお湯をかけるとすぐに効果が現れていましたが、それを、たとえば『一時間後に効能が現れる』といったように時間差を作る研究です」

「時限式の温泉ってこと？ そんなことが可能なの？」

「理論上は可能です。原理としては遅効性の温泉とでも言うべきもので、『時間とともに効能が強まっていき、ピークを越えると時間とともに効能が弱まっていく』という性質を

……………。

持たせるんです。それによりピーク時になると効能が現れ、時間が経つと自然に効能が消滅します。この温泉の凄いところは、中和剤なしでも温泉の効能を消せるという——」

「わ、わかったから。落ち着いて」

瞳を輝かせて語るハナは、こと研究の話題になると途端に情熱的になる性分だった。

「凄い研究なのはわかったけど、何の手がかりもなしに時限式の温泉なんて作れるの？」
「手がかりならあります。湯人が残した文献に『昼間は何も起こらないけれど夜になると効果が現れる温泉』の研究資料があったんです。なぜ湯人がそんな温泉を作ろうとしたのかは不明ですが」

そこで言葉をいったん切ると、ハナはおそろおそろといった表情で尋ねてきた。

「ところが、手元にある温泉だけでは調査がなかなか上手くいなくて……。それでアリマに折り入って頼みがあるのですが……」

「遠慮するなんて水くさいな。僕にできることなら何でも言っつてよ」

「ありがとうございます。では、裏山の立入禁止区域に入る許可をいただけますか？」

王宮の裏山は二百以上の源泉が湧き出ている温泉の宝庫だ。しかし、そのすべてが開放されているわけではなく、一部は立入禁止区域として人の出入りを固く禁じられていた。「どうやら立入禁止区域に珍しい源泉があるらしいんです。そこでは、お湯の中に白い花が咲いているという噂で……。その温泉をどうしても手に入れたいんです」

新たな成分の温泉が見つければ、今まで不可能だった調査ができるようになる。新たな調査に挑戦しているハナとしては、「珍しい源泉」と聞けば食指が動くのは当然だろう。「でも、立入禁止区域は足場が悪いうえに崖も多くて、過去に遭難者も出ているんだ。そんな危険な場所にハナを一人で行かせるわけにはいかないよ」

僕が要求を拒むと、ハナはがっくりとうなだれてしまった。そこまで落ち込まれると、突っぱねた僕の方が罪悪感を覚えてしまう。

「……しようがないな。行くときは山に詳しいガイドを同行させること。その約束を守るなら、特別に立ち入りを許可してもいいよ」

「ありがたいございます！ あ、でも、ガイドなんて誰に頼めばいいか……」

「たとえば、食材を探してよく山歩きしているイブスキなら案内役に適任だと思うけど」「イブスキ様ですか……。悪い方ではないのですが、ことあることにお説教を始めるのが少し苦手……」

「ああ、うん、その気持ちわかるよ……。だったらユフィに頼んでみたら？ ユフィは子供の頃から野山を駆け回っていたから、裏山は彼女の庭も同然なんだ」

「ユフィ様は違う意味で二人きりになるのは危険な気が……」

言われて僕は、入浴中のハナがユフィに捕まって服をひん剥かれ、胸を揉みしだかれていた光景を思い出す。うん、確かに危険だ。

「一緒に行くなら、私はアリマがいいです。……アリマのガイドは、だめ、ですか？」
不安そうな目で見つめられ、僕は言葉に詰まる。

ユフィほどではないが、僕も王宮の裏山を遊び場にして育った人間だ。ハナの道案内をするくらいわけもないけど……。

——そして僕は、お湯の中で白い花が咲き乱れている光景を思い出す。

僕はその場所に近づきたくなかった。あの場所に行くと、どうしても思い出してしまから。幼い頃に、そこで起こった出来事を。そこで見た光景を。

「アリマ？ どうかしましたか？」

きっと僕は青ざめた顔をしていたのだろう。心配そうにハナが顔をのぞき込み、僕は取り繕うように笑顔を作ろうとして……。

「アリマ殿下あああああ！」

血相を変えたイブスキが山小屋の扉を蹴破る勢いで乱入して、僕は顔色を失った。

絶句する僕に、軍服姿のイブスキは肩で息をしながら背筋を伸ばして敬礼する。

「アリマ殿下！ 一大事です！ 急いで王宮にお戻りください！」

「そんなに慌ててどうしたの？ もしかして国王陛下が農作業中にぎっくり腰になった？ それとも厨房の魚をミササが一匹残らず平らげた？ そうでなければ、可愛い女の子を見つけたユフィが暴走して——」

「そのようにありふれた出来事でこれほど騒いだりはいたしません！ よろしいですか、落ち着いてお聞きください。たった今、コハネ殿下がお戻りになりました」

「なんだって！ 驚きに息を呑む僕へ、ハナはきよとんとしながら尋ねる。
「コハネさんって隣国に留学している妹さんですよ？ 妹さんが帰って来たことが、どうして一大事なのですか？」

「それは、僕が温泉旅館を始めたことをコハネはまだ知らないからだよ」

「それが何か問題なのですか？」

「大問題だよ！ 温泉旅館なんて聞いたらコハネは反対するに決まっているからね」

コハネのことをよく知らないハナのために、僕は一言で説明する。

「僕の妹は、温泉が大嫌いなんだ」

ハナとイブスキを連れて大急ぎで山道を駆け下りると、小柄な少女が温泉旅館の玄関前に立って建物を見上げているのが目に入った。

身長はミササと同じくらい。万年雪を思わせる透き通った純白の肌に、月光を思わせる銀色の長髪がよく映えている。独特の形状をした服装は、少女が通っている異国の高等学院の制服だ。ユ国の北に位置する宗教国家「教国」では黒が神聖な色とされており、少女の制服にも暗い配色が多く用いられていた。

夜を思わせる服飾に、月を思わせる銀色の髪。整った顔立ちと物静かなたたずまいはどこか浮世離れしていて、まるで心を持たない陶器人形のようなのだ。

僕の存在に気づいたのか。旅館を眺めていた少女が肩越しに振り返る。一年ぶりの再会にも眉一つ動かさない無表情は見間違えようがない。

彼女の名前はユ・コハネ。十二歳の女の子であり、ユ国の第二王女だ。

その性格を一言で表すなら——冷血。

「や、やあ、コハネ。久しぶり」

「……」

コハネは僕の挨拶を無視すると、ついと視線を逸らして旅館に顔を向けた。コハネの淡泊な態度に慣れている僕は、つれない反応にも苦笑いするばかりだ。

「急に帰ってくるからびっくりしたよ。留学先で何かあったの？」

「これは何ですか？」

僕の問いかけをまるっと無視して、コハネは冷たい口調で旅館を示す。コハネの温泉嫌いを知っている僕は、内心で冷や汗をかきながら答えた。

「これは、僕の温泉旅館だよ」

「温泉旅館？」

「この旅館は僕が建てたんだ。本当は王宮そのものを温泉旅館に改築したかったんだけど、

頭の固いイブスキに猛反対されてね。仕方なく王宮の隣に旅館を建てて——」

「ふざけているのですか？」

「ふざけてないよ！ 僕は本気で王宮を旅館にするつもりだったんだ！」

「ふざけているのですね」

感情に欠けた口ぶりで、コハネが僕を非難する。どうやら我が妹は、兄にからかわれていると思ったようだ。……よろしい、ならば僕が本気だとはつきり伝えよう！

「僕は本面目だ！ 僕は、温泉の力でユ国を立て直すと決めたんだ！」

「正気ですか？」

本気どころか正気まで疑われた僕は、どうすればわかってもらえるかと頭を悩ませる。

すると僕たちのやり取りを見かねたのか、草むらの中から愚姉ユフィが悠然と姿を現した。

「ふっふっふっ。さしものアリマも妹の前では形無しだな」

「ユフィ？ いつからそこに？」

「うむ。可愛い妹に抱きついて押し倒そうと思ひ、草むらの中でチャンスをつかがっていた」

「あいかわらず変態ですね」

「あっはっはっ。久しぶりだな、コハネ。会えて嬉しいぞ」

「私は会いたくありませんでした」

「本当は嬉しいくせに。コハネは素直じゃないな。だが、そういうツンケンしたところも可愛くて私は好きだ！」

「鬱陶しいので黙っていてもえませんか」

「そう言わずに私の話を聞け。温泉はいいものだ。私はアリマの温泉旅館を支持する！」

「ユフィが温泉旅館を支持するのは、入浴中の女性客を眺めて楽しんだり、触って楽しんだり、揉んで楽しんだりするつもりだからでしょう。あいかわらずド変態ですね」

「うう。さすがコハネだ。痛い所を衝いてくる」

痛い所を衝かれたユフィが胸を押さえてうずくまる。凶星かよ。

「温泉旅館などやるだけ無駄です。それがわからないアリマは大馬鹿なのです」

水点下を思わせる凍えた声で断言され、僕は否が応でも思ひ知らされる。

——コハネは、僕のが嫌いなんだ。

当然だ。だって僕は、そう思われても仕方のないことをコハネにしたのだから。

コハネに負い目のある僕が、冷たい迫力に圧倒されて押し黙る。そんな僕に代わって声を上げたのは、ハナだった。

「温泉旅館は無駄じゃありません！」

いつもは大人しいハナが、珍しく語気を強めて食ってかかる。

「アリマはユ国の財政を立て直そうとしているんです。アリマの温泉旅館は、国を救うた

めの第一歩です！ それを無駄だなんて言わないでください！」

「……誰ですか？」

「私はハナマキ。ユ国温泉研究所の所長です！」

胸に手を当てたハナが堂々と名乗る。普段の人見知りな彼女を知っているせいかな、僕は名乗りを上げるハナの凜々しさに見とれてしまった。……が、

「あなたがハナですか。噂は聞いています。甲斐性なしで顔もいまいちで女性にまったくモテないアリマの寂しい男心につけこみ、色香でたぶらかした魔性の女ですね」

さりげなく僕の悪口を織り交ぜながら、コハネがハナを責め立てる。責め立てられているハナよりも、僕の方がダメージが大きいのはどうしたものか。

「昔からアリマは馬鹿でしたが、王宮を温泉旅館に改築しようとするほど無能で愚鈍な間抜けではありませんでした。アリマの脳みそが腐ったのは、ハナという女狐に惑わされて頭がおかしくなったからとしか思えないのです」

「ええと、もうちょっとマイルドな言い回しはできないかな？」

とぼつちりでダメージを受けている僕が懇願するも、コハネの罵倒は止まらない。

「アリマは常軌を逸しています。温泉旅館で国興しなんて狂気の沙汰なのです。国を救いたいのなら、もっとマシな方法があるのです」

「そこまで言うなら教えてよ。温泉旅館以外にどんな方法があるって言うんだ」

僕が言い返すと、それを待っていたかのように、コハネは滔々と語り始めた。

「最優先で行うべきは交易の強化です。貿易を盛んにして国を豊かにするのです」

「交易だって？ それこそ浅知恵だよ。ユ国にはこれといった特産品もないし、なにより国土の大半が山岳地帯なんだ。不便な山道ばかりで、どうやって交易を盛り上げるんだよ」

「だからアリマは馬鹿なのです。アリマは隣国の土木技術がどれほど進歩しているかわかっていません。最新の土木技術を用いれば、ユ国でも利便性の高い街道を整備できます」

「でも、道路が整備されたからって交易が上手くいくとは……」

「交通の拠点が栄えることは歴史が証明しています。道路が整備されれば交通量が増え、おのずと交易は盛んになり町も豊かになる。これは温泉旅館よりもはるかに現実的な策です」

な、なるほど。コハネの言葉にも一理ある。最新の土木技術で交通網を整備して交易を盛んにするのは妙案かもしれない。

「ただ、この案には一つ、致命的な欠陥があった。」

「道路を整備する費用はどこから捻出するの？」

僕の質問に、それまで歯切れ良く語っていたコハネが初めて口ごもった。

主要な幹線道路を整備するだけでも莫大な工事費用がかかる。そのうえ最先端の技術を

取り入れるとなれば、出費はさらに膨れあがるだろう。言うまでもなく、財政難のユ国にそんな大金はない。

「その点ならばご心配なく」

いきなり第三者の声が聞こえて、僕たちは一斉に振り返る。

僕は、王宮の外からこちらへと歩み寄る若い男を——上等な礼服に身を包んだ金髪の優男おとこを見つけて、驚き、すぐにユファイを見た。

声の主が何者か気づいたのだろう。ユファイは鋭い目つきで優男をにらみつけていた。

「お前は……」

「お久しぶりです、ユファイさん。またお会いできて嬉しいですよ」

ユファイの殺気を真正面から受け止めながら飄々ひょうひょうと笑っている彼の名は、バベル・バーニャ。かつてユ国を滅亡の危機に追い込んだ、軍事国家「帝国」の若き皇帝だ。

見た目は二十代前半。スマートな立ち居振る舞いが似合う長身の優男で、くせっ毛のブルンドと人当たりの良い柔和な笑顔は好青年を絵に描いたようだった。

だが、爽やかな風貌ふうぼうに反して腹の中では陰謀が渦巻いていることを、僕は身に染みて知っている。彼の暗躍により帝国軍がユ国に戦争を仕掛けたことは記憶に新しい。バベルは温泉と美姫ユファイを手に入れるため、陰謀を巡らせてユ国を窮地に追い込んだのだ。

「どうしてバベル様がここに？」

「ユ国の再建に力を貸して欲しいと、コハネさんに頼まれたのです」

コハネの横に並んだバベルは、親密さを示すように少女の肩へと手を置いた。

「彼女の留学先で偶然たまたま思いがけずコハネさんと知り合った私は、祖国を憂う彼女の純粋さに胸を打たれました。幸い私は多くの資産に恵まれ、帝国の優秀な土木技師にもツテがあります。このお金と技術を、どうぞユ国の発展にお役立てください」

「バベル様の厚意に感謝します」

すんなりとバベルの申し出を受け入れるコハネ。だが、そんなやり取りを信じられるほど僕はお人好しひとよしじゃない。と言うより、あまりにも胡散臭うさんくさすぎる。

「……今度は何を企んでいるのですか？」

「ひどいですね。私はいつも陰謀を企てているわけではありませんよ」

「ですが、あなたが何の見返りもなしに赤の他人の援助をするとは思えません」

疑いの目を向けられたバベルは、何がおかしいのか急にくすくすと笑い始めた。

「おっしゃる通り。確かに私は見返りを期待しています。ですが、それはあなた方にとっても悪い話ではないと思います」

まったく悪びれた様子のないバベルが、にこやかに本心を語る。

「今回、街道を整備するに当たり、コハネさんと一つ約束を交わしています。それは、帝国の土木職人をユ国の各地に派遣することです。道路工事は彼ら職人の指導の下で行いま

す」

最先端の土木技術を行使するために、隣国の優秀な技術者を招き入れるのは当然の采配だ。その提案自体に不自然な点はない。

「お恥ずかしい話ですが、ユ国との戦争に負けてから帝国の景気は下降気味ですね。土木職人たちも仕事がない状態が続いていたのです。そこへ来たのが今回の話です。つまり、ユ国の公共事業を引き受けることで帝国は多くの雇用を得られるのです」

ユ国は最新の土木技術と安全な街道を手に入れ、帝国は保証された仕事と賃金を手に入る。そう聞くと、確かにどちらにも損のない良い話のように思える。

「大量の資財を必要とする大規模工事は大きな商機となります。これは帝国の商業界にとっても久しぶりの『美味い話』なのです」

ユ国との戦争で大敗を喫したことで、帝国皇帝は貴族から強い反発を受けたと聞いている。だからこそ、皇帝としては景気の良い話で国内の立場を良くしておきたいのだろう。案外、コハネからの提案は渡りに船だったのかもしれない。

「そしてもう一つ、私にはユ国の道路を整備したい個人的な理由があります。実は……私はすっかり温泉にハマってしまったのです！ できるなら、もっと頻繁にこの地を訪れたい。そして温泉で身も心も癒されたい！」

邪気のない笑顔で、バベルは温泉が大好きだと打ち明ける。

「私は常々思っていました。『もっと交通の便が良ければ温泉にも行きやすいのに』と……。そんなとき、コハネさんから打診を受けたのです。これぞまさしく天の采配。私は喜んで協力を申し出ました。交通の便が良くなれば、いつでも温泉に行けますからね」
なるほど。客側にしてみれば、山奥にある不便な宿より、道路が整備された便利な宿の方がいいに決まっている。

そうか。交通の便を良くすることは、温泉旅館を繁盛させることにもつながるのか。

「以上が、コハネさんを援助すると決めた理由です。納得していただけましたか？」

「ええ、よくわかりました。そういうことなら喜んで道路工事を受け入れましょう」

「お待ちください、殿下！」

すっかり納得してバベルと握手しそうな勢いの僕に、イブスキが血相を変えて詰め寄る。

「落ち着いてください！ 殿下は完全に言いくるめられていますぞ！」

「なにを言っているんだよ。バベル様の提案は旅館にとってもいい話じゃないか。それとも、交通の便が良くなってユ国に不利益なことがあるのかい？」

「そ、それは……。ですが、この男は何を企んでいるか……」

「イブスキ。人を疑うより、もっと人を信じようよ」

僕が優しく諭すと、イブスキはあうあう言いながら頭を抱えてしまった。苦々しい顔をしているユフィを尻目に、僕はコハネへと声をかける。

「コハネの考えはよくわかった。僕はコハネの計画を応援するよ」

僕はコハネの道路工事計画を受け入れることに決めた。ユ国にとつて損になることは何一つないのだから、強く反対する理由はない。

僕の賛同を得たコハネは無表情のままうなずき、そして言った。

「では、温泉旅館を閉鎖してくれるのですね」

「それとこれとは話が違うだろ」

「違わないのです。温泉旅館はやるだけ無駄なのです。そんなことに労力を割くくらいなら、私の計画にもっと力を注ぐべきなのです」

「温泉旅館は無駄じゃない。『どんな願いも叶なう奇跡の温泉』には必ず観光客が集まる！」

「どんな願いも叶う？　なんですか、それは」

そうか、コハネは温泉調合のことを知らないんだ。ここで温泉の凄まじさを見せつければコハネを説得できるかもしれない。そのことを察したのか、ハナが会話を割り込んできた。

「ユ国の温泉には不思議な力があるんです。温泉を調合することで、馬をマグロに変えたり、蟻ありをベガサスにすることができるとです」

「正気ですか？」

「ですから……。いえ、説明するより見てもらった方が早いですね。コハネ様には叶えない願いはありますか？　あれば言ってください。どんな願いでも叶えてみせます」

「どんな願いでも？」

「はい！」と力強く答えるハナを、コハネは無表情でにらみつける。

「……では、賭けをしましょう。もしも私の願いを叶えられなかったときは、自分を詐欺師だと認めてユ国から出て行ってください」

コハネの理不尽な要求に、僕は驚き、ハナははっきりとうなずいた。

「わかりました」

「ハナ！」

「大丈夫です。私を信じてください」

温泉旅館を存続させるために、コハネの説得は必要不可欠だ。それがわかっているからこそ、ハナは無茶な話でも受け入れるしかなかった。

コハネが温泉旅館を認めるか。ハナがユ国を追放されるか。二人の命運を決めるコハネの願いとは――。

「では、温泉の力でドラゴンを捕まえてください」

「ドラゴン、ですか？」

「はい。ヌプル山に棲すむ最強のドラゴンこと『竜王ラドン』をここに連れてきてください。それができたら、温泉の力を認めてあげるのです」

それは本当にコハネの願いなのか？　真に叶えたい願いは別にあるのに、賭けに勝った

めにわざと無理難題をふっかけたんじゃないのか。そんな疑念を僕は抱き、そしてハナは、「……それだけでいいんですか？」

「それだけ？ 竜王ラドンがどれほど凶暴か知らないのですか？ 竜王ラドンは」

「いえ、それはいいんですが……。あ、ちょうどいいところに来ましたね」

そう言って、ハナはたまたまその場を通りかかったメイド服の少女を手招きする。

「うん？ なんじゃ？」

ハナの手招きに応じて、通りすがりのメイド少女がとこと近づいてきた。

ハナは小柄なメイド少女の肩に手を置くと、コハネに紹介した。

「竜王ラドンです」

「……………」

目が点になってしているコハネの周囲では、声を殺して笑っているユフィの姿があった。わかっていて黙っているなんて意地悪だな。と、僕は笑いを堪えながら心の中で独りごちる。

「状況がよくわからぬが……うむ！ わしが竜王ラドンなのじゃ！」

腰に手を当てて「えっへん」と胸を張るミササ。いつもながらノリがいい。

「ふざけているのですか？」

間髪を容れず不機嫌な声を発するコハネ。そのままメイド娘をじろじろと観察すると、

「あなたは誰ですか？」

「わしの名はミササ。温泉旅館で働く仲居じゃ」

「ナカイ？」

「旅館で働く女性のことを『仲居』と呼ぶんだよ」

温泉旅館の役職を知らないコハネのために、僕が簡単に説明する。

「メイド服は仲居の制服なんだ。その服は僕が選んだんだよ」

「幼い子供にメイドの格好をさせて悦に入るなんて、アリマは変態ですね」

「違うよ!？ そもそもミササは子供じゃないから。こう見えて百年以上生きている由緒正

しいレッドドラゴンなんだ」

「ふざけているのですか？」

「ふざけていないよ！ ミササは見た目こそ女の子だけど、中身は竜王ラドンなんだ」

「うむ、わしが竜王ラドンなのじゃ！」

「ふざけているのですね」

なんてわからずやなんだ。メイド服を着た幼女が、実は竜王と怖れられた凶暴なレッドドラゴンだとして信じてくれないんだ。

……普通は信じないよね。うん。

「茶番は結構なのです。早く竜王ラドンをここに連れてきてください。それができないのなら、ハナをユ国から追い出してください」

「いや、だからこの子が竜王ラドンで」

「早く、竜王ラドンを、ここに、連れてくるのです」
聞く耳を持たないコハネが語気を強める。

……ひよっとすると、僕たちは大きな勘違いをしていたのかもしれない。

これは「ドラゴンを連れてくる」という課題ではない。「何も知らない第三者にミササがドラゴンだと納得させる」という難題だったのだ。

それって、無理じゃないか？

「わしをドラゴンだと認めないとは、見る目のない娘じゃ」

全裸のミササが濡れた背中を僕に向けながら、コハネへの不満を述べ立てる。

「しょうがないだろ。ミササのような可愛い子がドラゴンだなんて誰も思わないよ」

「可愛い？ ほほう、そうか、わしは可愛いか。ほほう」

不満顔から一転、上機嫌で顔をにやけさせるミササ。こういう所が単純で可愛い。

コハネの説得に失敗した後、僕は脳をリフレッシュするべく露天風呂に入ることにした。そこへミササが「わしも一緒に入るのじゃ！」と押しかけて現在の状況となっている。

「何をしておるのじゃ。さっさとわしの頭を洗わぬか」

「はいはい」



最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！